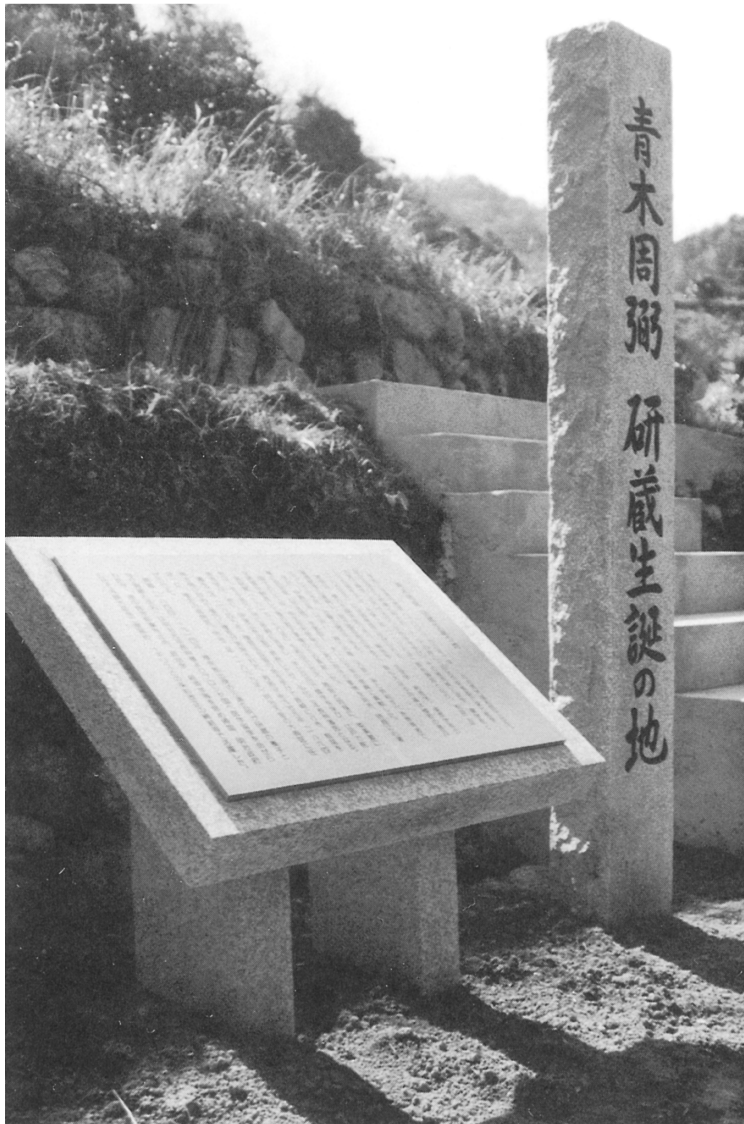


青木周弼・研蔵 記念碑完成



東和町大字和田（旧青木家屋敷跡地）

享和三年青木周弼（一八〇三丁六三年）はこの地周防国和田で出生。

幼少の頃から神童と称され、十二才の時に三田尻の能美塾で漢方医学、大阪で蘭学、江戸でオランダ医学を学び、その後長崎に遊学、蘭学医としての道歩み、天保十年（一八三九年）長州藩医となり、安政二年（一八五五年）には御側医に任ぜられる。

周弼は、優れた臨床医であり、解剖学、生理学、病理学、薬理学等の基礎医学に通曉し、我が国屈指の学者で、最も大なる功績は種痘の普及とコレラの予防・治療の確立である。

また、伊藤玄朴（江戸）、緒方洪庵（大阪）等と併称すべき教育者で、藩に医学館（好生館）を創設し、大いに文教の振興に貢献した。

国士としては、英主毛利敬親公に常に海外の事情を説き、時局に必要な事項を献言して藩の勤王事業のため貢

献した。

弟研蔵（一八一五丁七〇年）も和田で出生、周弼と同様に、能美塾に学ぶ。その後兄と共に長崎に遊学し、また日田で儒学を学び、江戸で医学を学ぶ。後に、伊藤玄朴の塾で教授したが、弘化二年長州藩医となる。

嘉永二年（一八四九年）種痘法伝習の命を受けて長崎に行き、痘苗を持ち帰り初めて藩内に種痘が実施された。周弼没後元治元年（一八六四年）に、藩主の御側医、明治二年（一八六九年）明治天皇の大典医に任ぜられる。

周蔵（一八四四丁一八六四年）は明治元年長州藩よりプロシヤ国へ医学留学を命ぜられたが、途中医学修業を止め、政治学、経済学等を修め帰国、明治政府に仕え外務大臣を二度務め、イギリスとの条約改正の締結等で活躍した。



記念事業専門部会長
米 安 晟

変転極まりない現代にあつては、一年も経たないうちに、忘れられてしまふのが常となつていますが、亡くなられて十七年経つても忘れらるることなく、優れた偉業を紹介された人がいます。その人とは、我が郷土の出身者である宮本常一先生です。この度出版された本の名は『旅する巨人』

宮本常一と渋沢敬三
といい、佐野真一氏が書かれたものです。この本の内容は、「柳田国男以後、最大の功績をあげたといわれる民俗学者・宮本常一の偉業と、物心両面で支えた器量人渋沢敬三の業績とを、三代にわたつて紹介」したものです。佐野氏は虚構をあばき、真実を書くノンフィクション作家として著名な方であり、「高貴な精神の系譜を訪ねる」とあるように、真実を伝えたものです。

すみずみにおよび、七十三年の生涯に合計十六万キロ、地球を四周する気の遠くなるような距離のべ日数にして四千日を数えたといわれ、まさに「旅する巨人」といえます。

宮本先生の調査の足跡は津々浦々に伸び、その仕事を後から支えた渋沢敬三先生は、「日本列島の白地図の上に宮本君の足跡を赤インクでたらずと、列島は真っ赤になる」と驚嘆され、また司馬遼太郎氏は「日本の山河をこの人ほどたしかな目で見た人はすくなくと思います」と称賛されています。

ところが、佐野氏は「宮本の故郷、周防大島東和町には記念館一つなく、宮本を知る人はほとんどいかなかった」指摘されました。

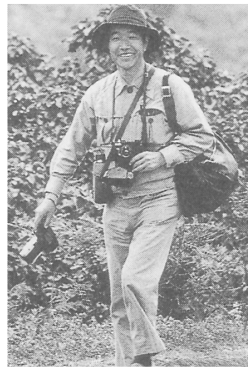
宮本常一と作家「水上 勉」

山が高いと麓の人にはその偉大さが解らない

宮本家に行くと、宮本先生が亡くなられた後、訪問された方々の芳名簿があります。大勢の人が訪ねてきていますが、その中に作家の水上勉さんの名があります。

水上勉さんは宮本先生と対談された際、まさか知らないだろ

うと思つて話した自分の故郷のこと、それも不便なところなのに、わざわざ訪ねてきて調査されていたことでの驚き、しかも貧乏な村ゆえに行われてきた、忌まわしい出来事に、理解をしておられたことへの有り難さと偉大さに、敬意を持たれたこと、白木の地名と同じ白木山が東和町にあることを知り、それを見つけたことなどを、奥様に話されたようです。



そのとき、宮本先生の偉大さを、地元の人があまりにも知らないことへの驚きを、

『山が高いと麓の人には、その偉大さが解らない』という表現で示されています。芳名帳には、水上勉氏のほかに、社会学者の加藤英俊、作家の高田宏氏など著名な方々の名が記されています。

また当時は柳居俊彦さんが町長であったことから、地元で宮本先生を知るための資料館を作るよう強く進められたようです。その内容は宮本先生の生い立ちが解ること、金持ちでもない、

農家出身の宮本先生が、いかに勉強し、民俗学者として偉大になつたのか、その経緯の解る資料館であつて欲しい、立派なものというより、ほかでは出来ないものであつて欲しいものです。水上さんの指摘された、山が高いと地元では、その偉大さが解らないものだという言葉が肝に銘じ、宮本先生の偉業を知る手だてを東和町に残したいものです。

水上勉さんの話より

子供たちの勉強の場であつて欲しい

第一に見せねばならないのは、子どもたちである。ここで生まれた宮本先生がどんな物を使って、どのような勉強をしていったか、これを先ず教えるのが本當の教育といえる。

学校の先生方は子どもたちにこのような教育もしてもらいたい。これが本當の教育である。これで愛郷心が養われる。足下を見つめることから始める。

東和町の人は宮本先生の他にも、大勢の立派な方が生まれ育つていて、まづしらねばならない、それを地元で教え、理解できる場を作らねばならない。それが宮本資料館であつて欲しい。

都会に出て学ぶこともよいが、先ず田舎で学び故郷を知り、愛郷心をもつことが大切である。故郷を忘れるような教育はしないこと。宮本先生の展示館は、このような故郷で学ぶ場所であつてもらいたい。

展示物は他にはない身近な物が欲しい

宮本先生はこつこつと自分の足で日本中を回り、常民に接し、話を聞き、常民から観る史観を打ち立てられた。そして大学を出ないでアカデミックな学問の世界で、立派な学者になられた。ここまでどのようにして到達されたか、解るような資料を集めて展示してもらいたい。ここにしかない物、これが本當の宝であり、大切な物である。

故郷の教育はまず故郷を知ることから始め、都会では学べないものを学んでおくことが大切なことである。

以上からいえることはただ資料館として展示するだけでなく、故郷としての東和町を知ることから始め、愛郷心を持ち、都会に出ても故郷を忘れず、大切に育てる人育てる場であつてもらいたい。

私たちは宮本先生の優れた業績を見直すと共に、改めて後代に記念として残すための事業を興したいと考えます。

文化発祥の地

長崎視察旅行

岩本重雄

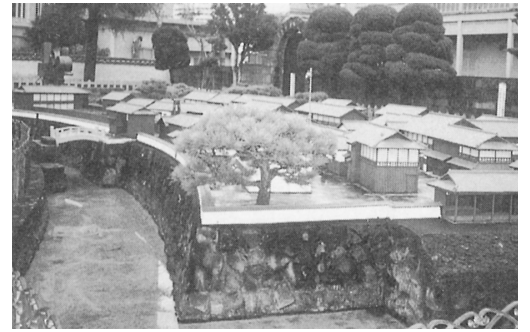
(一) シーボルトの旧跡

シーボルトは日本に近代西洋医学を伝え、科学的な総合調査にもとづいて、ヨーロッパに日本を紹介した最初のヨーロッパ人であった。私の心の中にはそのシーボルトが江戸参府往路の途中、文政九年三月二十九日、沖家室に上陸したという五条の桜並木に建立された記念碑が浮かんでいた。

長崎に到着すると雨の中を直ちにシーボルトの住居跡を見物しながら資料館に入った。シーボルトの偉大さを実感しつつ、陳列された五十人に及ぶ門弟達の活躍と努力、苦心の筆跡が感激であった。立派に筆字で記録された江戸時代若者の努力の結晶に涙さえ催ほした。

(二) 出島跡

出島はもともと長崎の町なかに住んでいたポルトガル人を隔離するために、幕府の命令によって築かれた人工の島であったが現在は地続きであった。二百年前に海底から築かれた石垣が昔のままに面影を止めていた。門限を過ぎていたが許可を得て



長崎出島の復元模型

場内を見学した。頑丈な門のみで往時の建物は無く、当時を物語る模型が一角にあった。連想を呼び起こす立派な築造であった。

翌朝はグラバー邸を見学し市街を展望。オランダ村を見て、長崎チャンポン（にぎりめしがついている和洋折衷）に舌鼓みを打ちながら、往古の偉人達の先見性に思いを馳せながら長崎に別れを告げた。



シーボルト記念館を

視察して

迫田 彌之

シーボルト（フリリップ・ファン・ツフォン・シーボルト）は文政六年八月十一日（旧暦七月六日）二十七日の時、長崎に来た。当時幕府はオランダと清国に対してのみ、長崎の出島に於いて、制限された貿易を許可していた。

シーボルトは日本に近代医学を伝え、又科学的な総合調査に基づいてヨーロッパへ日本を紹介した最初の異国人である。当時アジア諸国が次第に欧米諸国によって植民化されつつあった

が、日本が独立した国家を存続していくのは、どのような外交を展開すれば良いか真剣に考え、オランダやロシア、さらに幕府に対して、数々の提案をした日本の平和的開国案は、諸外国が結んでいる不平等な条約の内容と比べれば遙かに日本の国益を尊重したものであった。こ

よなく日本を愛したシーボルトを私たちは忘れてはならない。文政十一年（一八二八年）いわゆるシーボルト事件で翌年国外追放となる。その後再び安政六年（一八五九年）に来日した。この時も日本の利益となる方法を第一に考え、諸外国と向か

い合った。諸外国は好ましくなく思い、オランダ政府は帰国させたのである。

わが東和町に文政九年三月二日・三日と六月二十五日に江戸参府往復路に沖家室に停泊している。その時、牛ヶ首に上陸し周辺の島々のスケッチや植物採集をしている。その場所にシーボルト上陸記念碑が建立され、往時を偲ばせている。また、彼は日本女タキと結婚し、娘のイネは西洋医学を修行し明治三年産科医を開業し、皇室の典医として宮内省の御用掛を命じられた。又長男のアレクサンダーは外交官となり来日し、父の志を継いでいる。

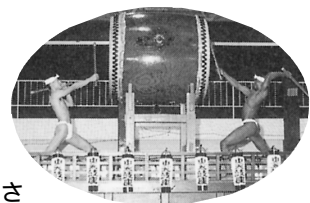
シーボルトの日本にかけた熱い思いを、記念館に展示してある数々の資料をみて感じる事が出来た。尚東和町和田の青木周彌もシーボルトの高弟であったことも忘れてはならない。江戸時代に東和町とヨーロッパ人シーボルトとの接点があったと言っことは不思議な気がする。私たちも歴史を知り学ぶ事が大切と思う。

わが町にも今昔の先人先達の偉業や資料を残す館で、二十一世紀に歴史や文化を伝え豊かな故郷の発展につなげたいものです。平成八年十月十七・十八日は有意義な研修視察であった。

とどけ太鼓の音、

宮本先生へ！

中本 健雄



第二回鬼太鼓座公演が、宮本アサ子さん、光さん、鬼太鼓座創始者の田耕さん座員一同

皆様のご好意により、十一月五日、東和中学校体育館において、昼夜二回行われた。昼の部は東和町内の全中学生を対象に行われ、公演終了後、希望者全員に大太鼓を始め、中、小太鼓まで打たせて頂き、中学生には太鼓の音とともに、すばらしい思い出になったことと思う。

夜は雨にもかかわらず、大島郡内より多数の皆様があつまリ、西木東和町長さん、柳居県議会議員さんよりのご挨拶、田耕さんより宮本先生についてのお話の後、座員全員の迫力ある、躍動感にあふれた太鼓の音にいつまでも拍手が続きました。

翌日は早朝より大島特産のみかん狩りを楽しんで大阪公演へ出発しました。

後日、田耕さんと座員皆様より、宮本先生の記念館建設に役立て頂きたいというご好意を頂き厚くお礼申し上げます。

温故知新



推進部会長
新山 玄雄

月日は流れて

かつて芭蕉は、「月日は百代の過客にして行きかふ人もまた旅人なり……」と言いました。旅の達人、旅から旅を続け、まさに「歩く、見る、聞く」という人生を身を持って送られたのが宮本常一先生でした。その結果として膨大な宮本学が今、私たちに残されています。

後退したのもいるよつです。確実に歳月は刻まれました。

記念事業はじまる

先生亡きあと、その志を継ぐと当時町長だった柳居俊孝氏（現県議）が先達となり、昭和六十二年宮本常一記念事業が始まりました。その記念事業の基本理念は、「……この事業は単に宮本常一先生の業績を顕彰するために行うものではない。宮本先生の理念を継承し、東和町の発展と町民の幸せを願って行うものである。」とされ、はなばなしくスタートしたのでした。そして、基本方向として「外に出た人が子々孫々にいたるまで、ふるさととして愛着をもち、誇りにすることのできる東和町。外に出た人が帰りたいときに安心して帰ることのできる東和町。東和町はそういう町であった。将来の東和町もよりよい状態でそういう町であり続けなければならぬ。」

ずと開けて来るはずである。「志は高く、意気軒昂でした。この間、記念事業としてふるさとづくり実行委員会と共催の講演会、シンポジウム、座談会の開催、宮本先生撮影フィルム複製作業、古い写真の収集作業、史料案内版の設置、機関紙「郷土」の発行などを行ってきました。その方向づけが東和町の町づくりの一翼をになつていきたいと思います。教育委員会でおこなつてきました民具の収集や収蔵庫の建設、東和町誌その資料編の発行も宮本先生の薫陶のためのものです。

当初の高い志、意気考えるところ、まだまだ足りないところばかりが目につきます。宮本先生の名を掲げての事業です。その実りの少なきを申し訳なく思っています。

旅する巨人

最近、相次いで宮本先生の評伝が発行されています。「彷徨のまなざし」「日本民衆の文化と実像」（長浜功著）それに「旅する巨人」（佐野眞一著）です。宮本先生のことは、その他雑誌にも

色々と取り上げられています。特に佐野氏の「旅する巨人」は、今年の大宅壮一賞を受賞され、高い評価を得ています。

この評伝のあとがきに氏は、「この評伝を書きおえてあらためて思うのは、この列島にもかつては、誇るべき日本人、美しい日本人がいたというある意味できわめて単純な事実である。名譽や栄達を一切望まず、黙々と日本列島の隅々まで歩いた宮本常一も、豪邸を物納して平凡と「二コ没」生活に甘んじた渋沢敬三も、宝石のような輝きを持つている。略

日本人はついでこの間まで、経済成長こそ自己の拡大と信じて疑わず、ひた走りに走ってきた。だが、バブル経済の崩壊で元も子もなく、日本人の胸には今、虚ろな空洞だけが広がっている。それだけに二人が歩いた日本の村々の急速な解体と大衆とよばれるようになった庶民のたしなみの目をおおいたくなるよ

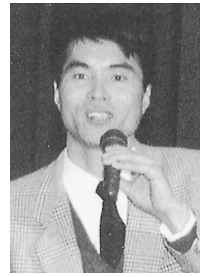
うな劣化に思いをいたすとき、いまもふいに胸をえぐられるような思いにとらわれてならない。「旅する巨人」を読んであらためて宮本先生の深く広い世界にふれたような気になりました。読んでいるうちに静かに心が奮い起つような感動的な本です。

これから

昨年十一月、推進部会で長崎シーボルト記念館に視察研修に行きました。先人の残したものをきちんと継承している姿に感動しました。過去があつて今日があり、そして未来もその連なりの中で展開していくのです。歴史学、民俗学が未来学である所以です。今、宮本記念館建設のことが各方面で言われはじめています。今、その時と想うのですがいかがでしょうか。「温故知新」ということなしには、未来の展開は開くことは出来ないと想うのです。

昭和五十五年三月東和町の若い人びとを集めて郷土大学をつくった。年に三十回すぐれた人を講師に頼み、勉強させるというもので、多くの企画をたて、実践した宮本の最後の作品といつてよからう。浜辺の家に帰り、妻と子、孫と暮らし、慕い寄るふるさとの若者たちを教育する。それがついの夢ではなかつたらうか。

東和町の信仰とくらし



印 南 敏 秀

一、調査に至るまで

東和町には宮本常一先生から石造物調査のお話があつて、はじめてうかがいました。『東和町誌』の調査がまだ行われていた二〇年程前のことです。

先生から「調査はつまみぐいではないけない」との指導があり、東和町全域の信仰やくらしにかかわる石造物の調査をいたしました。モノが中心の調査でした。ただし、『東和町誌・各論編』ではモノが中心となり、調査が不十分だったこともありまつりやくらしは省略したのです。

五年程前に平野と森で民俗調査をする機会があり、東和町のくらしの現状も知ることができました。そこで、都会に出る人が多く、地域のくらしが伝わらず、あわせて高齢化がすすみ、東和町の伝統文化の断絶の危機にあることを知りました。同時に今なら伝統文化を記録するこ

とが可能であることも知りまし。そして、一九九五年度から教育委員会の町誌編纂事業として「信仰とくらし」の調査をはじめることになったのです。

調査では島の東から西へと各自治会ごとに社会組織や地域の信仰の話をつかがい、ほぼ全体を歩き終え、現状の概観を知ることができました。ただし、まつり一つとっても実際に見ないと正確に理解できませんし、くらしは一度うかがっただけで理解できるほど簡単なものでないことは皆さん方のほうがよく御承知のはずです。

したがって、現時点ではまとまった話はできませんが、宮本先生が書き残された『東和町誌』の助けをかりながら、調査の途中で気付いたことを御報告し、思い違いなど御指摘いただければと思つていきます。

二、東和町の
神社調査から

荒 神 社

私達は地域を訪ねると、まず

神社と寺院を訪ねます。神社や寺院は地域の歴史や社会、人々の暮らしの現状を知ることのできる場所だからです。神社や寺院がしっかりと守られている村は安心して調査に入れます。東和町でも私達は安心して調査することができました。ただ、寺院の調査はほとんど進んでおらず、集落単位で祀られる神社の話をしたしたいと思います。

東和町には多くの神社が祀られています。どの地域でも祀られる神社と特定の地域にしか祀られていない神社があります。

どの地域でも祀られている神社の代表は荒神社です。

荒神社は情島・大積・小積・神浦・小伊保田・伊崎のように小さな集落では、地域の氏神として一カ所で祀られています。集落の大きな外人は郷と浜の二カ所、和田は筏八幡宮に合祀されるまでは小字ごとにあつたといひます。また、地家室は中原神社の中に併祀され、森はオム口（祠）が当屋をまわつて五年に一度荒神まつりがおこなわれますが、地域に社殿を持ちません。平野は荒神の社殿も伝承もなく、あるいは祇園社に併祀されたのかもしれない。

荒神社は、交代で当屋が回る当屋まつりです。当屋にあたる



と身を清め、精進潔斎してまつりなどに奉仕します。当屋が古くは神主を勤めたといわれ、今日でも村を代表して精進潔斎するところもあります。荒神社はまつり方からも、古くから祀られた重要な力ミであることがわかります。

民俗学は比較することによつて、くらしを考ふる学問です。最近まで私が調査していた芸予諸島の広島県瀬戸田町と比較しながら荒神についてさらに考えたいと思ひます。

荒神社は瀬戸田町でもほぼ全域で、小宮あるいは氏神として祀られています。瀬戸田町に荒神社は近代になって穀神社と多くが改称され、農耕神として祀られていたことがわかります。茗荷の荒神社には荒神神楽が伝わり、春まつりで荒神人形に酒を飲ませてその濡れ具合で作占

いをします。

垂水では地域全体で祀る村荒神のほか小地域で祀る荒神社があり、早瀬の荒神社は土地を開拓した家によつて新たに祀られて、現在も早瀬を耕作する家々によつてまつりがおこなわれています。新しく祀られた荒神社ですが、荒神社は土地をひろくときに祀り、豊作を願う性格の神であつたことがわかります。そして、今も森の中に祀られています。

宮本先生は『東和町誌』で荒神は地主神（地神）、農神的性格を持つと書かれています。荒神社は周防大島の人々が農地を開いた当初から祀り続けてきた神なのです。東和町に荒神社が普遍的に祀られていることは、東和町の人々が農業に依存してくらししてきたことをものがたつていふのです。

勸請神

特定地域で祀られる神社には、中央の有名な神社から勧請した八幡社・蔵島社・金毘羅社・祇園社などが多くみられます。なかで、八幡社は総鎮守、あるいは氏神として祀られています。

筏八幡宮は島末荘の東半分、下田八幡宮は島末荘の西半分の総鎮守として祀られたといえます。島末荘の実態はよくわかりませんが、広島県では八幡社は中世に関東から下ってきた為政者が総鎮守として祀った例が多いことがわかってきます。いずれにせよ総鎮守の存在自体が東和町における、古い時代の政治的枠組みをしめしているのです。

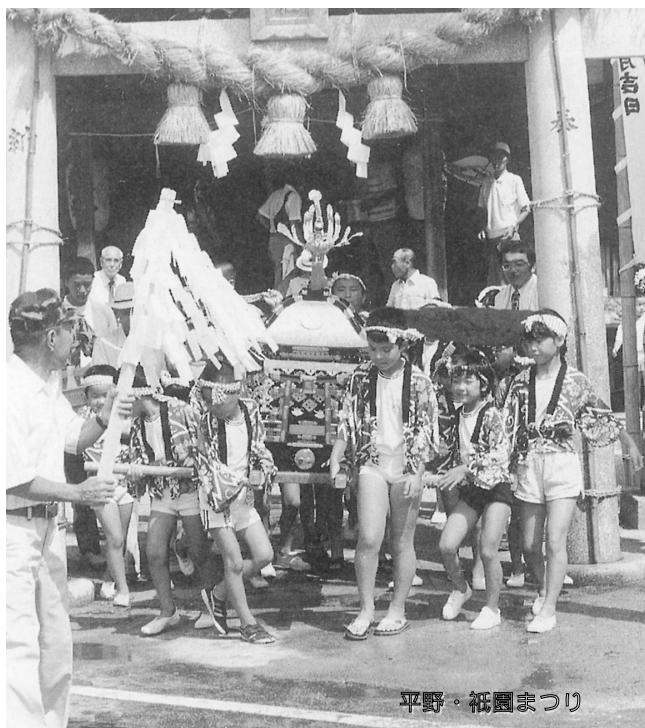
近世になると村落が独自性を高め、村々で氏神を祀るようになり二重氏子となります。和佐や伊保田など地域の氏神として祀る八幡社は、筏八幡宮など総鎮守の分霊を祀ったのではないかと宮本先生は考えられています。また、神浦や油宇には熊野新宮神社、佐連には日吉神社などが祀られています。これらは中世から近世にいたる村々の成立経緯や、人々の来歴を語っているのかも知れません。

職業神

村々を巡っていると、同業の人々が小宮に神を祀る例が見られます。生業の分化と共に、同業仲間であつたようになつた神々です。東和町でも近世末以後、船乗りや漁業など海に関わる生業が発達します。

金毘羅は航海の守護神で、航海安全の神として信仰されています。金毘羅は大積と小積では小宮として祀られ、地域の人々から信仰されています。外人の金毘羅は昭和七年と勧請は新しいのですが、やはり航海安全のために勧請されました。勧請時には部落役員が讃岐の金毘羅さんまで新造船で迎えにいきました。帰りに間違えて呉港に入り、波止場にぶつけますが、船がこわれなかつたのでますます信仰が高まつたといえます。

エビスは商売と漁業の神として祀られますが、東和町では漁業神として外人・船越・伊保田・情島などの海岸に祀られています。そして、今は漁業者の集まりである漁業協同組合を中心にまつりをしています。エビスは漁業の盛んな沖家室では、地域全体の氏神として信仰を集めるようにすらなっています。



平野・祇園まつり

同時に神の性格自体も時代や地域により変わることがあります。同時に神の性格自体も時代や地域により変わることがあります。同時に神の性格自体も時代や地域により変わることがあります。

平野の祇園社は筏八幡宮と下田八幡宮の氏子圏の境界に位置し、境界神として政治的に祀られたのではないかと宮本先生はおっしゃっています。実際に平野の氏神として祀るには、不自然な村はずれに祀られています。

東和町の境界神としては、外人と地家の峠付近に祀られていたサイサマ(塞神)のように民俗神が一般的です。サイサマを祀る場所には大木があり、草鞋などが掛かり、村人は前を通るたびに参っていたそうです。村外れに塞神が祀られるのは村人の生活範囲が狭く、身近かな場所に境が意識されたのです。

小泊の荒神祭であつたの後に村境に御幣をさします。塩田の薪山論争などがあり、政治的、経済的に村界を強く意識せざるをえなかつた時代背景が影響しているそうです。さて、祇園社の本社は京都の八坂神社です。京都のような大

神々の多様な性格

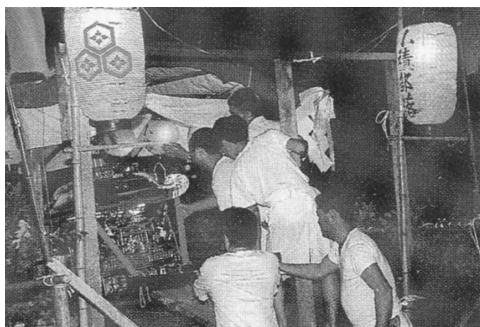
政治やくらしの変化にともなつて、地域の神々にも盛衰があり、新たな神を祀るようになり

都市では夏の疫病の流行が最大の関心事であり、古くから疫病を鎮める夏祭りが盛んです。平野の祇園社のまつりも東和町で数少ない夏祭りとして多くの参拝者をおつめしました。船でモモなどの果物を売りにきたり、露天商も集まつてきました。今年の夏の0157の流行は、以前なら珍しいことではなかつたのです。衛生環境がよくなり近代化の中で冷蔵庫の普及などがあり、夏の気候と都市生活の環境の悪さを現代人は忘れてしまったのです。今回の騒ぎは、備えを忘れた現代人に対する警告のように思えます。以前なら、祇園社のまつりが夏前に地域民に対して注意を呼びかけてくれたのです。

平野の祇園社は境界神として祀られ、やがて地域の氏神となり、東和町で数少ない夏まつりとして広く信仰されます。ただし、七日祇園など祭日日程は他の祇園まつりと共通しますが、まつり方は東和町の他のまつりとおなじ当屋まつりを受け継いでいるのです。

同じ神社でも信仰目的や内容が地域や時代で違ってくる。だからこそ個々の神社についての綿密な調査が必要であり、そこから地域の歴史やくらしがあらわになってくるのです。

浜や海 豊かな世界



管 絃 祭

山田神社や祇園社など、東和町の村まつりでは海岸を神輿が渡御することが一般的でした。森の神山神社のまつりは浜を海につかりながら渡御し、船に乗せて沖を巡りました。小積と大積の厳島神社のまつりには、引き船・管絃船・御座船がでて、村や神社の沖を巡りました。沖家室の漁師も御座船のあとをついてにぎやかでした。また、浜は盆踊りを踊り、精霊を慰め送る場所で、物を干し、歓談し、エンシキなどをおこなう場所でした。

油宇の新宮神社や情島の荒神社のまつりには、神輿を担ぎだす前に神輿もり全員が海までおりて海水で身を清めます。個人の家でも毎朝浜において潮水を持ちかえり、屋敷まわりを清めていました。海や浜は神聖な存在として強く意識されていたのです。

海は豊かな海産物などをもちますと同時に、恐ろしい場所でもありました。海にまつわる伝説が多数のこざれているのはそのためです。宮本先生の『周防大島を中心としたる海の生活誌』には、東和町の人々と海の深く豊かな関わりが記されています。

現在、東和町の場合は浜は細くなり、海水も以前とくらべると汚れています。人と海や浜との隔絶はまつりだけでなく、日常生活の中でもみられるのです。海辺に住みながら海や浜を意識しなくなつたことは、不幸なことといえます。海や浜の豊かさや恐れを知らない都市民の意識が、現在の環境問題を引き起こしているからです。また、海の彼方の世界を信じられなくなり、靈魂の帰りのないことが精神の不安につながっているからです。

東和町にはまだ豊かな海や浜の文化が残っています。まつり

やくらしを通して海と浜の文化を見直し、護り伝えることは今後の大きな財産になるとおもっています。

東和町の 社会と講

東和町にもかつては、伊勢講・金毘羅講・厳島講などたくさん講がありました。講とは本来仏教の講会に集うことで、同じ信仰仲間の集まりをいいました。

講についてはまだ十分調べてませんが、今も続く数少ない講にお寄講があります。正覚寺では他地域にもありましたが、今は小泊の檀家だけに残っています。西方寺にも大谷講・十三日講・山科講があり、山科講は女性講といえます。

お寄講では講仲間がまわり番で宿となり、説教を聞いたあと食事などをして親睦をはかります。講仲間は葬式で手伝いあう仲間でもあります。以前の記録によると正覚寺のお寄講は女男別々で、世代でも別れていたそうです。お寄講仲間は、性差や世代差がなく気楽に学び語れる機会だったのです。

一般に西日本はヨコ社会が支配的で、東日本はタテ社会とい

われてきました。本来講はヨコ社会に多くみられるのですが、正覚寺のお寄講には西日本のヨコ社会にくわえ、女性が男性と対等な海民社会の特色がよく現れているように思います。東和町の地域社会のあり方が、根強く残っていたのです。

正覚寺のお寄講の食事についても興味深い話があります。まわり番の宿でつくる食事は、競争意識から次第に贅沢になりがちです。ここでは贅沢になると正覚寺が宿になり、一汁三菜にもどして質素にかえすそうです。贅沢をおさえる知恵が、他地域で講がなくなつた後も講が存続できた一つの理由といえます。

なお、東和町で講が衰退するのは近代化の影響によるのですが、現状を見ると何故なくなつたのかわかります。これまで調査で御自宅に訪ねたとき、地域の人々の相互の信頼が強く、常に訪ねあつていふことを知りました。東和町のような成熟した社会では、あえて講などによつて人間関係を結びなおす必要がないのです。ただし、今後の東和町を考えると講をはじめとする有志的な結合は、祭礼組織や自治会組織を支え、日常生活を円滑にするために重要な人間関係だと思えます。

巡礼と 接待



東和町の巡礼と接待は以前調査しただけで最近では調べていませんが、今も毎朝お堂に個々にお参りする人々がみられ、大師信仰の盛んなようすがうかがえます。神浦では全戸が交代で毎朝仏飯を供えにいきます。

瀬戸田町にも島四国があり、現在も接待や大師信仰が盛んです。大師信仰や接待は元々大師講が中心でしたが、町場では有志に、村では自治会組織にかわつていきます。ただし、お堂の近くの家が世話人になり、接待の中心となり、日頃の世話もしています。確かめていませんが、運営のありかたは東和町も瀬戸田町とほぼ同じではないかと思えます。七力所参りといつても同じです。

ただ、接待にささげのおむすびが多いのは同じですが、沖家室のようにオカユを接待することとは瀬戸田町では聞きませんでした。東和町では春だけ接待をおこない、瀬戸田町では春と秋の年二回で、旧暦と新暦がまざります。旧暦と新暦が混ざるのは、地域相互で接待できるよう

配慮したのかもかもしれません。

周防大島の島四国巡礼も以前はさかんで、農閑期の三、四月頃にまわりました。以前は海岸道路もなく山道で困難が多く、五泊六日で一順したといえます。巡礼者は夕方になるとだれかれとなく声をかけてくれ、戦前は宿に困らなかつたといえます。毎年巡礼を続けるうちに馴染みの宿ができることもありまして、オオマワリといつて一〇〇人ほどの集団が旗を持ってまわることもありまして。集落規模の小さい大積では、オオマワリの一団が泊まるときは先発隊がきて、みんなが到着する前に宿割りをしました。オオマワリによる巡礼は、大師信仰の盛んな屋代からが多かつたそうです。宿では食事や風呂の世話をしてくれましたが、場合によっては自炊のこともありまして。自炊をしなければならぬので、お婆さんと若者など男と女が連れだつて一緒にまわるが多かつたといえます。祖父母などに子供のころから連れられ、長い道のりを歩くことが教育でもありました。また、巡礼途中でもみそめられて嫁に行くこともあり、若い男女の出会い場でもあつたのです。巡礼を通して周防大島の人々は、深い交流の機会をもつていたのです。

また、信仰の旅は古くからだれに気兼ねなく、旅することのできる機会でした。現在の旅行会社の観光コースに有名社寺が組み込まれているのは、そうした伝統が生きているからだと思えます。

東和町のまつりを考える

まつりは神に奉仕し、神酒や御食を献り、神意を承ることだといわれています。

まつりは神を中心として、氏子が平等の立場で、共通の目的を持って集まります。相互の連帯感がつまれ、地域共同の一員であることを確認します。また、

まつりは周期的に繰り返され、その時々で自分や家族、地域の姿がまつりの情景の中に印象深く思い描かれます。まつりでは性差や世代差で役割があり、社会参加(マナー)を学ぶ場でもありました。現在の若い人々が大事な客の接待や儀式で戸惑うのは、まつりが衰

退したからともいえます。ことに青年団はまつりを支え、活躍の場でした。若者は次々新しい企画を考え、皆を喜ばせようと努力しました。だから、地域民がみんな楽しんでくることができたのです。

余儀なくされています。そうした中で、東和町ではまつりの変化に対して積極的に取り組む地域がはじめています。伊保田では自治会が神輿もりを募ったり、準備やあとかたづけまで、まつりをもりあげようと積極的に協力しはじめました。

て、まつりを変えていく努力を氏子総代や自治会、さらには外に出てくる人達が一体となつて考える必要があるのではないのでしょうか。まつりも神事のように変らない部分と、青年団がつけもつていた華やかで常に変えていた部分があります。伝統を守ることには現状維持ではありません。変えてはいけない部分と、時代や社会の変化に併せ変えてゆく部分をきちんと分けて考えるべきなのです。そうした中から東和町にあつた、東和町らしいまつりを創造してゆく必要があるのです。



東和町に限らず、現代は急速に変化しています。縄文時代から弥生時代は採集社会から農耕社会へ、日本の歴史上で最大の变化をしたときでした。現在はそれ以上のはやさで近代工業社会から情報社会と変化をとげています。東和町では高齢化や過疎化が加わり、まつりも変化を

は、以前は常識でした。都市に出た人々が帰って参加できるまつりのあり方も、今後は模索すべきだと思つたのです。和田では荒神まつりをミカンまつりに変え、参加者が多くなりました。くらしが変わればまつりの目的が変わるのはあたりまえです。現在のくらしに則し

東和町の信仰とくらしの調査は、過去のことを記録し、残すことだけが目的ではありません。まつりがくらしのなかでどのような意味を持つのかを考え、東和町らしいまつりを創造するお手伝いも一つの目的と考えています。今後の調査での御協力をお願いし、今日のまとまらない話を終わらせていただきます。(この報告は東和町教育委員会主催で、一九九六年八月二十二日・二十三日にかけて総合センター等において発表したものを、整理したものです。御協力いただいた関係機関・各位に感謝申し上げます)